

茶色いコートを着続けた男

Sherwood Anderson, "The Man in the Brown Coat"

翻訳：新 絵見香

ナポレオン、馬に乗って戦争に行った
アレクサンダー大王、馬に乗って戦争に行った
グラント將軍、馬から降りて森を歩いてった
ヒンデブルク將軍、丘に立っていた
お月様、木立の中から顔を出した

私は人間がなしたことに關する歴史をつづっている。3つほどそういった歴史を書き上げた私はまだ若造だ。だが、すでに 30 万から 40 万の言葉を書いたことになる。

我が妻はこの家のどこかにいる。同じ家でもう数時間、私は座りっぱなしで執筆作業をしている。彼女は背の高い女で、髪は黒いがわずかに白いものが混じりつつある。ほら、彼女が静かに階段を上がっているのがきこえる。一日を通じてその動作は静かであるが、我が家の仕事はきちんとこなしている。

私はこの場所、この町へと、アイオワ州の別の町からやってきた。父は職人でペンキ塗りだった。彼は私のように出世はしなかった。私は苦勞して大学を出、歴史家となったのである。腰掛けているこの家は私たちが所有している。ここが私の部屋で職場だ。すでに人類に關する 3 つの歴史を書き上げた。つづったのはどのように州ができて戦が行われたかということだ。ひょっとしたら私の著書が図書館の棚に颯爽と並んでいるのを見たことがあるかもしれない。その立ち姿は衛兵のようだろう。

私は背が高いのは妻と同じだが、若干、なで肩だ。文章なら大胆に書けるとはいえ、内気な男である。仕事をしながらひとりきり、この部屋に閉じこもっているのが好きだ。ここにはたくさんの本がある。さまざまな国が本の中でぶつかり、せめぎ合っている。この場は静かでも、本の中では怒号が飛び交っているのだ。

ナポレオン、丘を駆け下り戦争に行く
グラント將軍、森を歩いていく
アレクサンダー大王、丘を駆け下り戦争に行く

我が妻は、真面目で頑固者な見た目をしている。時々、彼女に対して抱いている考えに自分で恐ろしくなる。午後になると、彼女は家を出て散歩へと向かう。店に行くこともあればご近所を訪ねに行くこともある。黄色い家が我が家のむかいにある。妻は通用口からでるとうちと黄色い家の間の道を通りぬけていく。

我が家の通用口が大きな音を立てて閉まる。しばらく待つ。妻の顔が漂いながら黄色い背景を通り抜け、絵になる。

パーシング將軍、丘を駆け下りて戦争に行った

アレクサンダー大王、丘を駆け下りて戦争に行った

些細なことが頭の中で膨らんでいく。机の目の前にある窓のおかげで、小さく切り取られた景色が絵のようになった。毎日座って眺めている。奇妙な感覚とともに、何かが起こるのを待つ。手は震えている。漂いながら絵を通り抜けるその顔がしていることを、私は理解できない。顔は漂って、それから止まる。右手側から左手側へとむかい、それから止まる。

顔は私の頭の中へとやってきては出ていく一頭の中で漂う。ペンが指からすり抜け落ちていった。家は静かだ。漂っていた顔の瞳は私のほうからそらされる。

妻はこの場所、この町へと、オハイオ州の別の町からやってきた。私たちは使用人を雇っているが、妻はよく床を掃き掃除していたし、時にはベッドメイクをすることもある。そこで私たちは一緒に寝ている。毎晩一緒に座っている。だが、彼女のことはわからない。私は自らを、自分という殻を破ることができずにいる。茶色いコートを身にまといながらも、脱ぎ捨てることができないのだ。我が妻はとても礼儀正しく、静かに話す人である。それでも、自分の殻の中から抜け出すことはできない。

妻は家から出て行ってしまった。彼女は気づいていなかったのだ。どんな些細な考えも筒抜けであると。私には彼女が考えたことが分かるのである。それが幼少期、オハイオの町の通りを歩いていた時に思い浮かべたことであつてもだ。私は彼女の頭の中の声を聴いていた。小さな声を聴いていたのだ。恐怖の叫び声を聴いたのは、彼女がはじめて癩癩を起して、私の腕の中に飛び込んできたとき。再び、恐怖の声を聴いたのは彼女の唇が励ましの言葉を投げかけてきたときだった。結婚してこの家に引っ越してきた最初の晩、一緒に腰掛けていたときのことだ。

奇妙なことである。ここに腰掛けて、今と少しも変わらない状態にいるというのに、私の顔が漂って、黄色い家と窓が作り出した絵の前を通り過ぎていったとしたら。奇妙で素晴らしいことである。妻と絵の具のように、混ざり合うことができたとしたら。

女の顔が絵の前を通りすぎてしまえば、彼女はあつという間に赤の他人だ。彼女は私にとって赤の他人なのである。彼女は去ってしまったのだ。通りを抜けて。彼女の頭の中の声はまだしゃべり続けている。私はここで、この部屋にひとり。神によって生み出された人間ならば誰もそうであろう。

奇妙で素晴らしいだろう。私の顔が絵の前を通り過ぎるようになれたとしたら。私の漂っている顔が彼女と混ざり合えたら、どんな男とも、女とも混ざり合えたなら一奇妙で素晴らしい出来事となるだろう。

ナポレオン、馬に乗って戦争に行った

グラント将軍、森に行った

アレクサンダー大王、馬に乗って戦争に行った

教えてあげよう。それは一ときにこの世界の一生とは私の頭の中にある人の顔のなかに漂うものであるということだ。世界を知らない顔が、私の目の前で立ち止まっている。

なぜ私は自らの言葉を他者にむけて発しないのか。なぜずっと人生を共に生きておいて、妻との壁を打ちこわすことができているのか。すでに、私は 30 万から 40 万の言葉を書いている。そこに生を実感させる言葉はないだろうか。いつの日か、自分に話してきかせるのである。そうしていつの日か、自分の人生の格言にするのである。